九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王運熙・楊明著『隋唐五代文学批評史』

柳川, 順子
広島女子大学国際文化学部 : 助教授 : 中国古典文学

https://doi.org/10.15017/9674

出版情報：中国文学論集. 24, pp.119-128, 1995-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

書評

王運熙・楊明著『隋唐五代文学批評史』

柳川順子

『隋唐五代文学批評史』は、国家重点科研項目「中国文学批評史系列叢書」の第三巻として、一九九四年十月、上海古籍出版社から刊行された。唐代を中心に、相前後する隋・五代を併せた三百六十餘年間の文学批評史を対象とする、全篇七八八頁にも上る大部の論著である。著者である王運熙・楊明両氏は、中国文学批評史研究の重要拠点、上海の復旦大学にて教鞭を取っておられる方で、斯界における代表的学者であることは周知の通りであろう。この質量ともに群を抜く大著に対して、たいした学問的蓄積も無い評者が果してまともな論評を為し得るものか、実に恐れ多いことではある。だが、若輩故の厚顔無恥さを以て、大学者の胸を借りるつもりで敢えてこの書評に取り組みたいと思う。

一

唐代は、中世の終焉に位置する時代である。この三百年の間に、貴族層を基幹とする六朝以来の社会構造は崩れ去り、これに代わる一般庶民層の台頭が、社会の様々な局面に大きな変化をもたらすこととなった。勿論、文学においても例外ではない。すなわち、閉鎖的な貴族社会を舞台とする小さな文学集団から、より幅広い中流出身の知識人層へと次第にその活動の中心的担い手が移りゆき、このことが、文学のあり方を根本から変質させることになったのである。かかる過渡期的情況にあった唐代文学は、従ってその変容の実相を単純な一本の線で進化論的に辿る

ことは全く不可能であると思われる。例えば、中世文学の精華が新しい時代の風を受けて開花したとも言える近体詩の確立と、六朝貴族社会の育んだ文体「四六駢麗文」への否定的論評の出現とが、ほぼ時を同じくして共存していたりするのである。

新旧の錯綜するこの時代の文学批評について、本書は決して理論一辺倒のドグマに陥ることなく、広範囲から収集した豊富な史料に基づいて、あくまでも実証的にその実態を明らかにしようとしている。中でも特に目を引くのは、従来この分野の論著においては、どちらかというと評論の内容解釈に主力が注がれて来たように思われるのだが、本書は、その時代その論者の実作をも意欲的に視界に組み入れ、批評と創作という相表裏する二つの側面の両方からアプローチして、その文学思想の全体像をできるだけ客観的に捉えようとしている点である。また、同じ文学についての評論ではあっても、批評ばかりではなしに、創作理論の方にも相当の重きを置いていることは、上述の如き論究態度と同源に発するものであろう。思うに、そもそも批評というものは、まずある既存の現実があって、それに対して投げかけられたアンチテーゼなわけである。ということは、文字通り「批評」のみを取り上げる文学批評史であっては、それ自体宿命として、文学史の実相の半面しか描き切れないのである。この点について、本書は優れて自覚的である。実作や創作論をこれまでになく重要視する本書は、「批評史」と銘打ちながら「批評史」を越えようとした、実に画期的な論著であると言えよう。

この他、全篇を通じてその底流に認められる基本姿勢として、文学論そのものをテーマとする文献資料ばかりではなく、実作の中でさりげなく示される文学思想にも十分に目を配り、また、歴史書等に記された些細な記事の中からも、文学批評史研究に資する文献を丹念に拾い上げようとしている点が注目される。可能な限り幅広い分野から史料を収集しようとするこの基本姿勢は、何の思想にも貫かれていない単なる博引旁証とは明らかに一線を画する。むしろ、一つの理論方向へ単純化する傾向の強かった従来の類書に対する一種の批判として、この史料第一主義とも呼び得る論究態度が取られたようにすら感ぜられる。史料が示す現実の多様性を積極的に受け止め、多元的にその実相を説き明かそうとする著者の姿勢は、例えば晩唐の作家における文学評論の多面性に言及して、「これらの批評家の意見を考察・論述する時には、ある一つの側面ばかりを強調してその他の側面をないがしろにするこ

とのないよう心すべきだ」と、敢えてその原則的姿勢を明言している（五八〇頁）ところにも、その一端を窺い知ることができる。

このように、本書はその考察の対象として実作や創作理論をも十分に重視し、また論述に当たっては、多方面から収集した豊富な史料を縦横に活用する。かかる実証的方法論が本書の眼目であったことは、著者自らが「説明」の中でも述べているところだが、実にこの真摯なる論究姿勢こそは、その全体構成から個々の論述における細部の表現に至るまで、全篇を通じて脈々と流れる本書の基調音なのである。

二

ここで、全篇の概略を紹介しておこう。本書は、「隋と初唐の文学批評」「唐代中期の文学批評」「晩唐五代の文学批評」の三編に分かれる。そして各々の編は、全体の情況を要約して論ずる「緒論」と、個々の批評家や著作等を詳細に検討する各論とから成る。

第一編「隋と初唐の文学批評」では、「隋代の文学批評」と「初唐の文学批評」の二章が各論として設けられている。隋代については、この時代の文学批評の気風（第一節）、及び『中説』の著者王通の文学思想（第二節）が取り上げられ、初唐については、太宗李世民と唐代初頭の歴史家・政治家の文学批評（第一節）、上官儀・元兢・崔融といった近体詩確立への途上に位置する文人たちの創作理論（第二節）、そして、「初唐の四傑」と称される盧照鄰・駱賓王・王勃・楊炯（第三節）、及び唐代ならではの作風を開いた陳子昂・盧蔵用・張説（第四節）の文学思想が詳細に紹介され、また、これらとは別の視点から、『史通』の著者、劉知幾の文体論（第五節）や、『文選注』の注釈態度に垣間見える李善の文学観（第六節）が論じられている。

第二編の「唐代中期の文学批評」では、「盛唐の詩歌批評」として、王昌齢・李白・殷璠・杜甫の詩論（第一～第四節）が、「中唐の詩歌批評」として、元結・高仲武・皎然・白居易・元稹・劉禹錫の詩論（第一～第六節）が紹介され、他方、無韻文については「中唐の古文家及びその先駆的文学批評」と題する章が設けられ、天宝から大

暦に至る時期（第一節）、及び貞元・元和期（第二節）の作家たちに見られる、古文復興への先駆的評論を丁寧に拾い上げた上で、唐代の二大古文家である韓愈（第三節）と柳宗元（第四節）、及び沈亜之・李翺・皇甫湜といった韓愈の後継者たち（第五節）の文学論が詳細に検討される。

第三編「晩唐五代の文学批評」は、「晩唐五代の詩文批評」と「詩句図・『本事詩』と詩格」という二つの各論から成る。まず、前者においてその文学思想が取り上げられたのは、李徳裕・陸希声・孫樵・牛希済といった、従来それほど重要視されてこなかったこの時期の批評家たち（第一節）、晩唐の二大詩人と称される杜牧と李商隠、及び同じ頃成立した『唐詩類選』の編者である顧陶（第二節）、皮日休・陸亀蒙・呉融・黄滔・顧雲等、晩唐末期から五代にかけての作家たち（第三節）、『二十四詩品』で有名な司空図（第四節）、それから、第三節の作家群とは傾向の異なる、唯美的色彩の濃い韓偓・韋荘・韋穀・欧陽炯といった文人たち（第五節）、そして『旧唐書』の編者、劉昫（第六節）である。他方、これらの詩文評論とは別個に、この時期大量に出現した、言わば啓蒙書的性格の強い文学批評専門書にも光を当てたのが最終章であって、張為の『詩人主客図』（第一節）、孟啓の『本事詩』（第二節）、晩唐五代の詩格の数々（第三節）が詳しく紹介されている。

三

以上が本書の概略である。このように羅列すると、作家毎にその文学思想を紹介する、何の変哲もない概説書のように見えるかもしれないが、実はそうではない。そこで、本書の前身である王運熙・顧易生両氏主編の三冊本『中国文学批評史、上冊』との比較を中心に、先にも述べたその論述姿勢の独自性を明らかにしてみたい。本書が三冊本上冊と類似する体裁を持ちながらも、内容的には相当な発展を遂げていることは、著者自らが「説明」の中で誇らかに宣言しているところでもある。

まず全体の構成について。三冊本と本書との明らかな相違点は、詩歌批評の分野において、いわゆる「盛唐」「中唐」をどのように扱うかという点にある。前者では「盛唐」を特にクローズアップすることなく、概ねは「唐

代前期の文学批評」の章に繰り込んで、その脱六朝的文学論の概略を辿るに過ぎなかった。これに対して本書は、「唐代中期の文学批評」の中に「盛唐の詩歌批評」と「中唐の詩歌批評」とを設け、両者の質的差異を截然と区別する。そして、このような構成上の改変に伴い、三冊本とは異なった位置付けが為されるに至ったものもある。例えば杜甫は、前著においては元結という作家とともに「唐代中期の詩論」の冒頭で紹介されていた。これは、杜・元両者の間に交友関係があり、しかもその文学思想にも共通する部分があったことを思えば確かに一理あると言える。ところが、本書では両者を独立させ、杜甫は「盛唐の詩歌批評」の最終節に、元結は「中唐の詩歌批評」の冒頭に各々振り分けるのである。この組み替えは、恐らく次のような判断に基づくものであろう。すなわち、杜甫という詩人は、南朝以来の新しい詩の様式と、風骨を重んずる盛唐的詩風とを融合させた唐代詩歌芸術の集大成者であり（二七二頁）、一方元結は、諷諫を旨とするその詩論の内容（三〇三頁）から言って、中唐の詩人群に組み入れる方が適切である、との判断である。近体詩の芸術的完成が杜甫によって為されたとするのは既に定説と言ってよいが、本書が、近体詩の確立を見た盛唐期のために独立した一章を設け、王昌齢に始まる本章の結びに杜甫を配置することは、この共通認識に沿った極めて妥当な編集と言えるだろう。

もっとも、盛唐と中唐とを区分する文学史観は既に広く行われているところであって、著者自らは「盛唐は文学理論・批評の分野においては作家も資料もさほど多くなく、しかもある作家は中唐との関連性が強いため、一緒に論ずる方が都合がよい」（一七一頁）と述べてはいるけれども、両者を一括して「唐代中期」とする必然性が本当にあるのかどうか、なおも疑問の残るところである。

さて、本書を従来の類書から区別する最大の特色は、何よりもまず取り上げられた史料の豊富さである。本書に至って初めて本格的に論じられた作家や著作はかなり多い。

例えば、初唐の上官儀・元兢・崔融、及び盛唐の王昌齢の創作理論は、先の三冊本上冊等においては軽く触れる程度の扱いに過ぎなかったのだが、本書ではそれぞれに独立した一節が設けられ、実に丁寧にその詳細が論じられている。この時期の文学批評は、内容的には、南朝流の艶麗な作風を退け、漢魏の風骨を慕う論調が主流であるのだが、実は時を同じくして、創作論の方面においては、声律のバランスや対句に美的感覚を研ぎ澄ます、南朝以来

の詩歌様式が徐々に完成されつつあった。つまり、文字通りの「文学批評」のみを追いかけていたのでは、近体詩確立に向かうこの時期の文学史的推移の実態は見えてこないのである。このような意味において、本書がこの時期の創作論に大きな比重をかけるのは、実に卓越した見識であるように思われる。そして、かかる着想を史料的側面から支えるのが、日本の僧、空海の編著に成る創作理論集成『文鏡秘府論』である。著者は、この書物の史料的価値を非常に高く評価しており、初唐の創作理論以外の分野でも、この書によって新たな見地を獲得している部分は少なくない。一例を挙げれば、『文鏡秘府論』に引く隋代成立と見られる文学創作論、例えば劉善経の『四声指帰』や杜正倫の『文筆要訣』といった著作が、多く声律や対偶、句式等を説く、いわば駢文作成のための参考書であることを指摘し、そこに、隋朝文壇が依然として駢文全盛の情況にあったことを読み取ろうとする（十九頁）。文学批評史研究の分野において、『文鏡秘府論』をここまで大きく取り上げた論著は、中国においては未だかつてなかったのではないか。

史料収集の触手を創作論の方面に拡大しようとする姿勢は、晩唐五代の詩格類に対しても向けられる。従来この種の手引書的創作理論書は、文学論としては低級であると見なされ、まともに扱われることはほとんど無かったと言ってよい。ところが本書では、当時の文学的情況の一端を窺い知るための資料として、また後世の詩話類の源流の一つとして相当にこれを重要視する。完成度の高い評論ばかりを選りすぐるのではなく、むしろ考察の対象を広く裾野にまで押し広げることによって、当時の文学界の最大公約数的情況を探り出そうとする研究手法には大いに啓発される。

一方、文学批評史研究の資料として、『文選』李善注を取り上げる着想にも目を見張るものがある。確かに李善の注釈の中には、修辞法の指摘や、後の詩話類の萌芽とも思える評論的コメント等が散見する。誠に、読むという行為それ自体が既に評論なのだと気付かされる。また、五臣注をも援用しながら、作品解釈において、典故の指摘のみならず、その寄せるところを懇切丁寧に解説しようとする文選学の注釈態度に、『詩経』『楚辞』に対するのと同様な伝統的「興」の発想を見ようとする着眼点にも興味をそそられる。ただ、李善注・五臣注を一括して論ずることに対しては疑問を覚える。というのは、上述の如き「興」的発想は、五臣注の方に圧倒的に強く認められる

のであって、両者の注釈態度の差異には、この二つの注釈書を生み出した初唐と盛唐との間における文学的風土の変遷、『文選』受容者層の拡大等、極めて興味深い問題が潜んでいるように思われるからである。

それはともかく、以上に述べてきたように、本書は、従来さほど重要視されてこなかった創作論の分野を積極的に取り上げ、更には、これまで文学批評史研究の資料としては扱われてこなかった文献さえも意欲的に論述の対象に組み入れている。そこには、史料そのものに語らせようとする実証的論究姿勢のみならず、文学批評史をより多角的に捉えようとする柔軟な発想が窺えるように思う。

さて、先の梗概紹介のレベルでは指摘し得なかったものの、各節の下に立てられた細目や各論の細部の論述の中にも、本書独自の姿勢をよく表しているものがある。一例を挙げるならば、唐太宗を中心とする唐初統治集団の文学思想に対して、従来になく丁寧な分析・考察が為されていることである。すなわち、この時期に成立した勅撰の正史にて展開される文学批評を始めとして、唐朝草創期の統治階級には、六朝以来の軟派文学を鋭く批判する論調の強いことを従来通り示す一方、彼ら自身の実作が、実は南朝流の艶麗な文学趣味を濃厚に引きずっていることを見逃さない。そして、このことの傍証として、太宗側近の文人、劉孝孫の「続古今詩苑英華序」（『全唐文』巻一五四所収）という史料を一つのトピックとして取り上げ、そこに示された文学的価値観が必ずしも反南朝的でないことを指摘するのである。著者は、この史料とかの史官たちの評論とを併せ見ることによって、この時代の宮廷文壇の雰囲気を立体的に把握する必要があると説く（六十三頁）。実作を重んずる論究態度は、この他にも本書の至るところで発揮され、例えば『詩式』の著者として有名な皎然の文学思想を論ずる際にも、その理論の分析に先だって、まず始めに彼自身の創作活動やその作風を検証する項目が設けられている。

また、文学に言及するあらゆる評論文を同一平面上に並べるのではなく、まず各々が本来所属していた分野に戻し、その批評家の意図したところに即してその意義を問い直そうとする姿勢が顕著である。例えば、劉知幾の『史通』に見える反駢文的文体論について、これを短絡的に中唐の古文復興に直結させるのではなく、彼の主張があくまでも歴史書の分野における文体改革に限られていたことを、本節の冒頭においてまず強調する。そしてその際、周到にも『史通』の文体そのものが駢文であることに注意を喚起するのである。この他、例えば初唐以来の一連の

駢文批判は、官吏登用制度との関連において理解されるべきものである（一九六頁）とするのも極めて妥当な指摘であろう。もっとも、このことについては、古川末喜氏が「選挙論からみた隋唐国家形成期の文学思想」（『九州中国学会報』第二十二巻、一九七九年五月）において夙に論じているところではある。ただ、文学という概念をどのような範疇において捉えるか、非常に難しい問題ではある。というのは、中国においては古来、歴史学・政治・文学の三者はしばしば同一人物の上において重なり合うものであったし、その文章も、少なくとも唐代半ばまでは地続きの文体を有しており、従って、歴史学や政治的分野においていち早く起こった文体改革の動きは、たとえそれが直接的に文学の改革を目指すものでなかったにしろ、必ずや文芸創作の場にもいずれ影響を及ぼさずにはおかなかったと思われるからである。

半面、純然たる文学以外の分野にも目を向けて、文体の歴史的推移を総合的に捉えようとする姿勢も窺われる。例えば、古文復興の気運が勃興した中唐期以降においても、朝廷内で用いられる文章は依然として駢文だったのであり、文人であると同時に官僚でもあった古文家たちは、必ずしもあらゆる場面において駢文を否定するわけではなかったとの指摘（六一三頁）は極めて示唆的である。

さて、今一つ特筆しておきたいのは、文学の政治的効用を説く評論に重きを置く傾向の強かった従来の論調に対して、かなり意識的にこれを修正しようとする姿勢が認められることである。例えば、韓愈や柳宗元といった古文家の文学思想を論ずる際、彼らが文学のもたらす精神的愉悦作用を肯定的に主張していることをこれまでになく強調する。また、白居易の文学についても、その諷喩詩ばかりをクローズアップするのではなく、諷喩と表裏を為す閑適や、私生活において詠ぜられた感傷、そして晩年に特に多く作られた雑律詩にも十分目配りし、努めてその文学思想の全体像を描き出そうとしている。ただ、依然として諷喩詩をより高く評価することには変わりなく、ネガティブな感情を詠じた雑律等に対しては、例えば三冊本のように「白居易詩論的消極成分」とは決めつけないまでも、やはり、参考資料として無視することはできないという程度の扱いである。だが、白居易における非諷喩詩、特に晩年の雑律詩は、中唐の文人官僚社会における詩作活動の実態を伝える第一次史料であり、また、その日常生活から題材を得た詩群は、唐宋間における詩風の変質の過程を如実に示している。このような観点から、白居易の

雑律詩はもっと重要視されてよいと評者は考える。それから、閑適・感傷・雑律の三者を混同しているのは不適切である。この点に関しては、静永健氏の「白居易における詩集四分類についての一考察――特に閑適詩・感傷詩の分岐点をめぐって」（『中国文学論集』第二十号、一九九一年十二月）という鋭い論考がある。

ところで、これはただ今述べてきたことと深く関連する問題だと思われるが、本書の全篇を通じて、「審美」なる言葉があまりにも安易に用いられているような印象を受けた。政治的教条主義に陥るまいとするあまり、この文学の審美的愉悦作用なる概念に絶対的権限を与えるのであれば、却ってまた別のドグマを形成することになりはしないだろうか。文学を、この側面において特に意識的に肯定しようとする姿勢が、史料の読解に牽強付会さを生ぜしめている部分もある。例えば、太宗を中心とする唐初統治階級の文学思想を論ずる一節に引用された、『封氏聞見記』巻三「貢挙」からの次のような文献（四十三頁）に対する読みである。

王師旦為（吏部）員外郎、冀州進士張昌齢・王瑾並文詞俊楚、声振京邑。師旦考其文策為下等。挙朝不知所以。及奏等、太宗怪無昌齢等名、問師旦。師旦曰、「此輩誠有詞華、然其体軽薄、文章浮艶、必不成令器。臣懼之、恐後生倣效、有変陛下風俗。」上深然之。

ここで王師旦が張昌齢らを評した語「其体軽薄」について、著者は「その文辞を指すのではなく、傲慢不遜といった類の人格上の欠点を指すのだろう」と解釈し、当時の統治者たちはあくまでも張昌齢の文章そのものについては評価していたのだと主張する。しかしながら、ここはやはりその文脈から見ても、文章自体についての批評だと見るのが妥当であろう。すなわち、張氏には確かに華やかな修辞的才能はあるが、しかしその文学の本質的風格は軽薄で、表に現れ出た文辞は浮わついた艶やかさを放っているに過ぎないのであって、そのような上面ばかりの文章を為す者は、朝廷にとって立派な人材とはなり得ない、と言っているのである。このような意味での「体」の用例としては、『詩品』上品「張協」の項にいう「文体華浄、少病累」、同中品「張華」にいう「其体華艶、興託不奇」等が挙げられる外、『文心雕竜』の体性篇や『文鏡秘府論』南巻の論体篇にいう「体」もこの意味である。

*

以上、本書を通読する中で考えたことを述べてきた。評者にとっては実に示唆に富む論著であった。著者は、決して一方的に自説を展開するということはない。むしろ、豊富な研究資料を提示し、共に考えてみようと誘いかけてくるかのようにすら感じられる。この客観的実証性を重んずる論究態度、そして、これまで指摘してきたような文学批評史研究上の新見地において、本書は紛れもなくこの分野における画期的論著であると確信する。